特42
7
444

崑山
三曲
卷續
花月
鐘墠

三

255
55

1E
9

第

帝國圖書館藏

ツヨク

花の盛りは

ワキマエ

コトヽ

コトヽ

コトヽ

コトヽ

明治
24 1
内交

みなへしは當今

みなへしなるにたゆ

ず扱も和州

より登れる芳野の櫻を見及

ぶまでなる名花あれども者方

十里ばかりあまりの花見ばや寺
かなひ給ひぬるみすり手岩
の梅をあくまでみるにつけ
ては問ばまづの花をとてとまれ
るの宣旨を蒙て作今風の
とゝ哀作　都はいかゞもつく

櫻ばなの種ハ何ぞ
そゝ寿そ今ぞ咲ける
花ハ雲かと詠めるは哀寿の
名残ぞと余可知ふるれば
そゝ寿の孫ハ
哀ぬ

ゆふ山おろしは心静カなる花
ヤイヤエて
をながめうずるみそらは
こう
守ずもやはら尾の山桜実もら
ずもやはらこうえ又
ずもやはらこうえ又
ずもやはらこうえ又

[illegible]

[illegible]

[illegible]

れ桜ハ清神ずみてゐる狂ふ花な
向ひ湯作申作 ワキヲ うもの〜
みのよれ桜の神ずをるべき
テヲ
猶ふるふ 宮ず所不審ハ出 コトハ 程
りぬふ杉よす野のなもとの
桜をぬ作まきまきゆるる

下セニ
人ふそ去〜れ折〜ぬ〜ぬ〜り勝
ニ中
なれ〜ふ〜ふ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

れも邪魔なるれば花の
寄ばかりもおぼつかなふさんろの古恵
ら
ぶべき沼するみよ野の神に
風あらぶるものびらそこの
らけむなりるも花さよ

もちろ、風みるかつらもり
ろ、出婦乃神ぞうし
音ろやあろ、ひよるまろを
ぶ入ろ、ゆるる屋の松尾
ろ。實相の花成。開くる法
ち色ろ、ひよの色の桜

家擬の門の水清くさゝれの月
けさのるせゝふ波の濁りみぐらあ
りてても流れ大井川を水
上いよもつるべ井戸を
もゝはなゝ咲るゝ花を
みちちゝ庭前のまを切る

咲うへさぶ高き
の雲も晴ぬべし山桜
長閑さあゝ鳥ぬ咲るも
枝い鳥さゝ山日も既て暮行
のよのまゝ秋すせ行べし
さもみゝ咲みぎゝ芝ゝる

雲ふかのうそ寄る湯殿の西山や
みゆきふる
みゆきふる
三月
三芳野の
ちりぬる花の
種うへて
あそびぞ同出度この神遊び
ぞめでうそ
ぞめでうそ
花

社すぎ
ゆきつもる
つもりけめ
つもりけめ
松の色
青柳の
青柳の
ぶ
みそぎ
みそぎ
ぶ
下ハ
下ハ
根よ
亀ふ
亀ふ
萬代と

ゞやをく狩あそびちやゞる
（上ヤ）
神楽の報きと（マイ 寺上）
け狂ひるゞ
翻せ音曲
秘曲も度重る
（上ヤ）
そいゞる打ち
（上ヤ）
不思議や南の
かぜより吹くる風の異香薫ゞ

端雲ゞあゞ
ひきぬ（こえ入）ほゞ先
ゞやをゞ
ゞ
（上地）
（早笛 寺上）
ゞの
（シテ上）
和光和物の古姿
ゞ
（ヤ）
ゞ
ゞ
ゞ
ゞ
ゞ
（ヤ）
ゞ
（上地）
ゞ
（ヤ）
ゞ
（シヤ上）
ゞ
（ヤ）
ゞ

業(ゴウ)の苦(クゲ)患(ハン)をうまき
上地
ちらまし虚空(ヤラ)ふ御手をあ
ぎて、忍(チ)者海の煩悩を
上州(ヤラ)えこ二
らひ悪魔(ヤラ)降伏の正蓮の
まゑ(ヤラ)ふぞ明(ツル)を放つ。國
ぜをてふ(ヤラ)ぜを守るぞ(ヤラ)ちひ

をあらひ(ヤラ)ごもり陽(ツル)なる。花(ヤラ)は權
現同侍(ダイ)(ヤラ)長(ヤラ)の(ヤラ)まがをとゝ
ろ(ヤラ)ものあ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ
のぐ(ヤラ)ぞれなたつ(ヤラ)まゝ指(ヤラ)ぬ
きつ(ツル)ぞ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ
ぬ(ヤラ)ぞ(ヤラ)も(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ(ヤラ)ぬ

ぢうゆく書うべくそうろう

正尊

ワキヨリ

是ハ西塔ノ武蔵坊辯慶ト
ゾ云ケル依ト我君判官殿ヲ
金殿ヨリ出ス若十人付申ベキ
ト仰ケレバ不和ノ成ル
ヤウニ心ヲ合テ一人宛皆

ちりそて仁ばも去年門正
月末曾義仲を追討さよ
り沼田度〻年家を責たゝ
ばせ言てぼ昌ゝ一先鎮め四
海をきすゝ勧賞をとなふす
べき為ゝ沼島ゝ振る逆

櫓の異見を聚ゝ給ふざるを
遺恨よりゝ我君を従奏
中ゝ行ゝ分先古平宋和ゝ成治
ひゝゝゝ海ゝ出作正号
と申春日ゝ起ゝ
いわゝ君を孫ゝ申さむと守

乗まで急ぎ車をとゝまれるのぢ俵
みゝは猫の目作ぶ出作ぶ旅宿
へとゝぎいぶ、る業門中は判
宿殿より待ぶ侍はむゝぶ
ゝいぶ山ゝ者特世屋門ゝ出へゝ
武蔵殿(シテヲ)ゝあ、めづゝゝやぢそ

世方へ出へゝ　脇(ワキ)家は出ぶ侍
ぶ(ノボ)り目出ゝゝ作ぶ是は君より
世出世みゝいぶ沿門より関
ゝ及ぎれ行ゝ(シコウ)ぶ何ゝは
ぬぢ舗会殿門ゝ出ぶも関れ
成作問ぶゝ(イ)ぶで待ゝまり出き

ろの所をみては　さんば宿に
ひる細りして。能野と手指の百
ゑ不岡所とりて。明日京家
仕くた。路次より遠例仕り散
ごの所をみるほどふぷらと遊
中ては　毒細所は作ぶ所

あまぞ。作今待供中さろ
所をみる　毒つるはるへ共
ぞめり養ぜを加へ必ず何ろ
中作べ　いやく所時も
ちや國の所をとぶ学めれ
度れぞめ勢ぶ作ぶ所中方

と、シテ　是非とも、いを申さぬ武蔵殿
ワキ　さても剛なる出作房も
上寺方　いかなるあらじ、いるるあらじ。
ぼきばくぶ、ぼきばくぶ、ぼきばくぶ、
ト、　しざともいらばふるるも
ト、　よや寵り給ひぬ。きえているの、

ト、　殊さいじやく
ワキ　いるるやうて
出作出尊を百連れまうてい
判官　出方へと申作へ
ワキ　是ていぬ。
ふへしまうまいらへ
判官　いふ出作房
メツラ　扨、扨行の為ぬ。
シテ　鐘会居候ずり寵ふなるら
ト、

作さたる古文は
同古文をまゝ
とゆゝ也。都より別(ベチ)の細文
ゆゝ。偏に古(ヨリ)取たゞる
作かまへて能(ヨク)守護させ給へ
さて御(イ)使いつまも
判官
ゆも

あるべき義経討(ワキ)たる古使
と仰れ行たまへ御使のご
さくだ名を指(サシ)ノボ
字沼瀬田の橋ひろ(ト)ヒ
はさぶきとなり(ゼン)
あんと思ひ出作房(ボウ)物語

作さたる古今もゞ屋をは
同古文をまゝ引る言葉よ申き
とゆゝ。都よ部ノ細ゐく
ゆゑ。偏よ古今ノ抜とたゞ石
作ゞ加まへて徒守護を治へを
うそ御使ゆゝ。判官も京

あゝ。義経討なるうたる古使
と伝れ行えたまゝ御使ノ
うゝ大名を指ノ指るで
ゞ沿頼田ノ指ゝもひゝ郎
けさふきとなりうゝあり加ま
あゝと思ゝ。出作房うゝ物語

するやうにただちに討ち
と法師付給ひつるめで僧
みちのくに山法師ありしの程
をとしたべきあり　義経法
やがてうの人乃様に言ふより君と
持仕出さるべき武器乃

武蔵殿だに有ずとて申され
て法師共ぞ不ぶらのひ
さぐるを事なるすべきまずづ
きまいるべきうわきをとり
くせなむさて坊ぞ法師寄
みちくべるべきぞ

さまを行ゲ（カ）れるべき。聊宿所の事
ける向ハ野しまを行ひ為ゑ在上
りては　梶（判官）ふぐ渡奏より義
経と鍾馗へもひ[illegible]ぐ道より
おひかえさまらとふいふ
其事ハいろぐ（シテ）ぢ屋やんぐみれ

みるくハ食く渡ぐ怠あるざる都き
起請文を書あ（上ちん）り仰今宵
よ（上ちん）ぐべしや
ぢ[illegible]ぐ宿の序を
ぢ[illegible]ぐ[illegible]ぐ（ウ）ぢ[illegible]ぐ（ア）ぢ[illegible]ぐ
者みるぐ目筆（ア合）を足をもつき歩（ハキ）
慶よろうハわるぐ（ワルク）きれ敬（ウヤマ）て

申起請文ハ梵天帝
釈四大天王焔魔法王五道の冥
官奉ル府君ハ閻浮界地ハ伊
勢天照大神と初り伊豆
箱根富士浅間熊野三所権現
ハ城ノ鎮守稲荷祇園加茂

貴船ハ播三所松尾ひゑの社
ハ日吉国ハ大小神祇冥道
清ル鷲ノ山ハ氏の神
金々正尊対手ふ所上まで
ハ洪水偽ハ洪水ハ洪水の
御罰をこうり災せを所鼻ル

陸羅坊まちに去ありよりて
老僧又かけらう又作を事
九月日に尊さ憤たるかの
毛もよりちて地らうきるもと
より虚言ふ男へども又を振
かちもする器用を感わが

め御さうさをやちるかり
かつ古前よ猫ひお目むもめ
よ静とくる日拍子やうとう
ふつわきやふふ足ら
らかる法そたぐひるを前乃
猶君が代きなせるもとび

みまく麻乃雲かくれぬとて
なるまでとゝまるまぐ
かゝるぬ契りを頼む中のぐ
あぐてぬ心を弥そ去るゝよ
くゝ申さと去ぐるふいきめれ
出仕坊御前を所陶をば若も
ぜ寝可なるべを落べばをまぐ迫
出申きり いるゝ中去御今
出仕ぐ宿可を見きふつゝを
いる家る幕乃内よ矢をおゝ
を張りぐぐも貞武具を御
ゝゝゝゝ丸給えてぐる

和語(モウテ)にきこえぬす申は
判
ケトより覚(カク)悟は前るまじ行は
ずつまるべきぞと 其(ワキヤウ)まま
やどて御座うとらち 志(シワカ)づらふ
岩(キセ)猪(ナガ)しまきる 義経是を
めされつ(ウ)ゝ御ちせ(ケ)ら(ウ)や

志づゝと門(ウ)戸(ロ)より出給る
門(ア)をひらき物(ア)ゝ
る孰(ニ)を物(ア)ゝ 一(セイ)ヤ立(ル)ゝ 志(ア)ら浪(ウ)
とゞそるやき(ア)ゝ
又(モ)ゝ ぶ(ウ)きこゝろ(ウ)ふ(ア)るわを(ウ)ゝ 其(シテ)時
正(ウ)る駒志づゝと打よせて(タイ)ぬ

合して京学問所を建
設の御使ぶ作正尊京に我守
ありて九郎大夫判官殿の謀
の大将なりぞうそう
御陣をまとぶ合してそよ
ばなりける　味方に坊ハ見を

出作坊をとらも
とまもとまとむ
ぶに思ひ深ぎ三位殿を
をきもとして門外に切て出ぎ
ぎよそりとりたる海の人ぶめ
きけきんで敵よきり

時平慶れもてみまそぐめする
古佐坊佐よきけ拇も書つる
てそぐ起倩の四時とら松まちあ
そふ[ト]ぐ[ト]しだ[ト]古力やそぐまち
きじば 光景 大将そぐきかあらで
しどのむらもちわひつぎそぐ[ト]

慶をめかきそぐこのかるけまじば
天晴(ツル)醤量(キレウ)のぐ侍(タイ)れ扱海(光)を
たそぐ喜ぬきじば
よあそぐねぐるも[ト]正尊の内ようをそ
そる陸奥(上そそ入)の国の信ぐ娘和の
年治光景也とぐ音そぐそ

うち家をる　元ヲウチヨリ　ワキ　うちゆ家もろ家ル
もの所扱ハ海ゆ出仕ゴ所ガ
我ハ不見ウ去ゐまぞも志　上同
とぶ報ぎんと　長刀やかて
ゐ為をしウ　元入　悲や海ヤ手ム
うきんと。ヤ長刀とうも拂ひ

ヤ　ぷきゐぶきぞ　又ゐ為ヤ　ヤ　ぷうぷ
とうてバうぶ　ゐ　ゐとゐせ。ゐ　元入
ねうぶうゐ　ゐ　ゐ　

ぢぎ和尊
ぢぎ和尊させてぢぢ
と馬よりおり立入ぢぢ
ぢぢ和引直ぢぢまを
ぢぢ和ぢぢ解も法
ぢ切拂ひぢぢ正尊が
ぢとひきたるぢぢ解ぢぢ

ぢめ解ひぢぢ押ぢぢ
ぢぢいやぢぢ投ぢぢ大坊ぢぢ
め縄ぢぢ負ぢぢ投ぢぢ男ぢぢ同人
ぢひぢぢ弾ぢぢ
ぢぢ入ぢ

巻絹

ワキ 松尾大明神に仕へる臣下也
さても我君あつまる霊夢
と蒙り給ふ巻絹を所
熊野に納めせらの宣旨み
但さぶぞより巻絹をあつめ作

去間都より奉るべき巻絹おろ
ろ作じまりていらで神ぜ前よ
（に対男）
納めでやとねはる（ヨク）うとそでめ
（ラ）（イ）（ト）（ミん）（ト）（ニト）（ト）（イ）（イ）
ひそび衣ぐ（ト）（ミん）（ト）（ニト）紀ひ踊よいぎやい
（ト）（ミん）（ト）（ニト）（ト）（イ）（イ）（イ）
うが（ト）（ミん）（ト）（ニト）（ト）（イ）（イ）（イ）
ても。振いらてろひやきるべきら

ぶ（ト）（ア）（ト）（ア）（ト）（ア）

二月上寺
きづ河もよのびぬ記の開都で
ーアーヤウーニーニーニーアーソーニーニーニー
ーアーニーニーニーニーニーニーニーニーニー
ますぐとぶウ文を拾ま
ーーイトーーーーーーーーーーーーーーーーー
そもさを行イコトーニーソーニーニーニーニー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ぺらぞそぐ知そ作ド熊野のぐ
元ーアーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ウーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
元ーイコトニニイ
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
よたやつ作ねみ寄り〳〵 と息
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
作狂ふ三熊野よ寄そは出そ

音あ〳〵は天神へまづやと男
はやく梅の匂ひの中をは行く
よふは後宮見る梅みを作
世梅をそを行と為る男作
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ねをは南無天満天神心ヲの
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
祈ぶとかあへをなりはくを

狩ゐ人の言ふ様を心の中に
思ひ向ひて君に先立て
みちゆく申しきもいろみ業門は
都より巻絹を持て来てる
行ゐ人あるぞ其
めを見る中に泣く人
と定まる中に其方の神もの
じやうぐやでいまめあり
きあり其きとてきまれ
あり羅門もくひと言せう
くあつてすれだべどが
行ゐいまめ行ゐ其者ハ

きの音あり
の天神みて一首
の奇とよろこび我手向去れ
ば納受あまじ神ぞ涼
しき三熱の苦
る我身のくらべ人の命と海
ぞ縄うけやそうつ手ぐ

おのぐるまにうつ
けるの髪の神さびや
文めの縄の泡の立うんとう
手をそそぐ心ぞすくも君代の
松の行ろもまびし情ぞや
昔は扱行と申る所なそ

作ず　洲（シテ）らのは青すれ天狗
すて一首の奇とよく物よる向
し青すれば少くく縄とさき
逆へ（ワキ）異ハ人きする守と家
星しまの所かほど賊き青の
等まどもむべき守思ひもす

ぎいう模みもらんがりき神宝
知てあるよ（シテ）物も神宝を偽り
ゐ和ぎあ山ば似青きの物よ手
向うの紫のぶの白を似り
ゐ人逆へ物文れ白をばづく
べ（ワキ）洲ハ人ハ中よ及びぶ

よ世世にをすてゝ遊ぶ基王の
白とゆべし　男女　今ハさびうゆる
及び彼を白明乃山陰よりも
うゝしきを梅のきゝとうり
しを何とあくぞ梅もてゝて
如びうを青をよあつさを物る

むめ花　シテ　みなハざりきぞ作
うきるべきと　セエ　憤しハらゝびなる
きゝものを　ア　ト　二月　初二　ト心　ア
今より山直拾方
便りちゝ　ヤ　元又　元又
る板よ如び　ヤ　ア　ア
ちゝ納交あまゝば今
ちゝ　ヤ　ア　ア　中　ア
ぞそせ給ぶ奇べ

ゆるさ勢治べしまいらせ心
アふかくし歌もの通力と
吉まるれば宮ちぐびあぶ
ざちぐちきとの縄をとく
くゆまれ治へや　出弥八人
出敬よりの威をすぐ

出弥の護よりれ　言葉
ばちむ世ふあとぐ見又
そちぐれ茂よりれ　言葉
ちれ野ちをくぐ
むるんちぐあれ
かんぐゆれ庭ひふねり

ぞるかなよ　ぎまことさまに　見る
よりも　ぞ　育てまいくらうる
ちまは　地よ　照り　月　世の　月　ゆう
風　雲　花　さ　咲　まり　首　を　稼
ぎ　まば　よ　ろ　ば　悪　会　を　者　ぎ
如　天　ま　ば　き　よ　地　ま

まば　や　ま　あ　か　め　ゆ　い　よ
一　ま　ば　さ　ま　ゆ　い　ま　が　ま　と
ば　や　ま　ば　天　笠　ぞ　ま　も
僧　ぶ　ま　行　ぜ　基　菩　薩　の　御　を
ま　ま　霊　山　の　釈　加　迦　仏　も　や　る
契　ま　ま　真　如　ま　ま　ば　あ　ば　え

つと孫奇あまたび沙を弄るおび〳〵そよ拳うすれかひあるて文殊の御顔をおがむるとやうびよ佛くをあるもわ奇れ德よあるまやの神ハ出雲ハ重垣かそぎの内もきせの

ため内ちびゝ芸つゝへ守つゝ神の吉めつゝふゝざゝ宿の風うけうゝ我れもらるゝ

ばのつとをまうせられて祢をあゝを中さ祢ひく謹ゝ再拝

柞當ゝばゝ國の内

こゝかしこせんけまいてそうぶ
地よりこで是地となりゞ今の古
（中ニ入ル）（上同）
孝是まり　ちまぶてそけ
（金剛界ひ）　（シテ）華花
世界熊野ハ阿蔵界　て行
（入）（ラヲ引）（上同）（ア）（合）
ぎゝ浮ぎ有ぞ程や　不思議やの
（ヨリ上）

ひ（ヲ）ぞ弥（ミ）なり　（ヲ）の（ア）さもあ
（ヲ）（ヲ）（ヲ）

月ハ　元ヲ二　元

今宵ハ　二世をたの

月ニ　元

萬文殊　三世の

月ニ

ゲ　まん普賢

月ニ

月ニ

ゆ　かげ

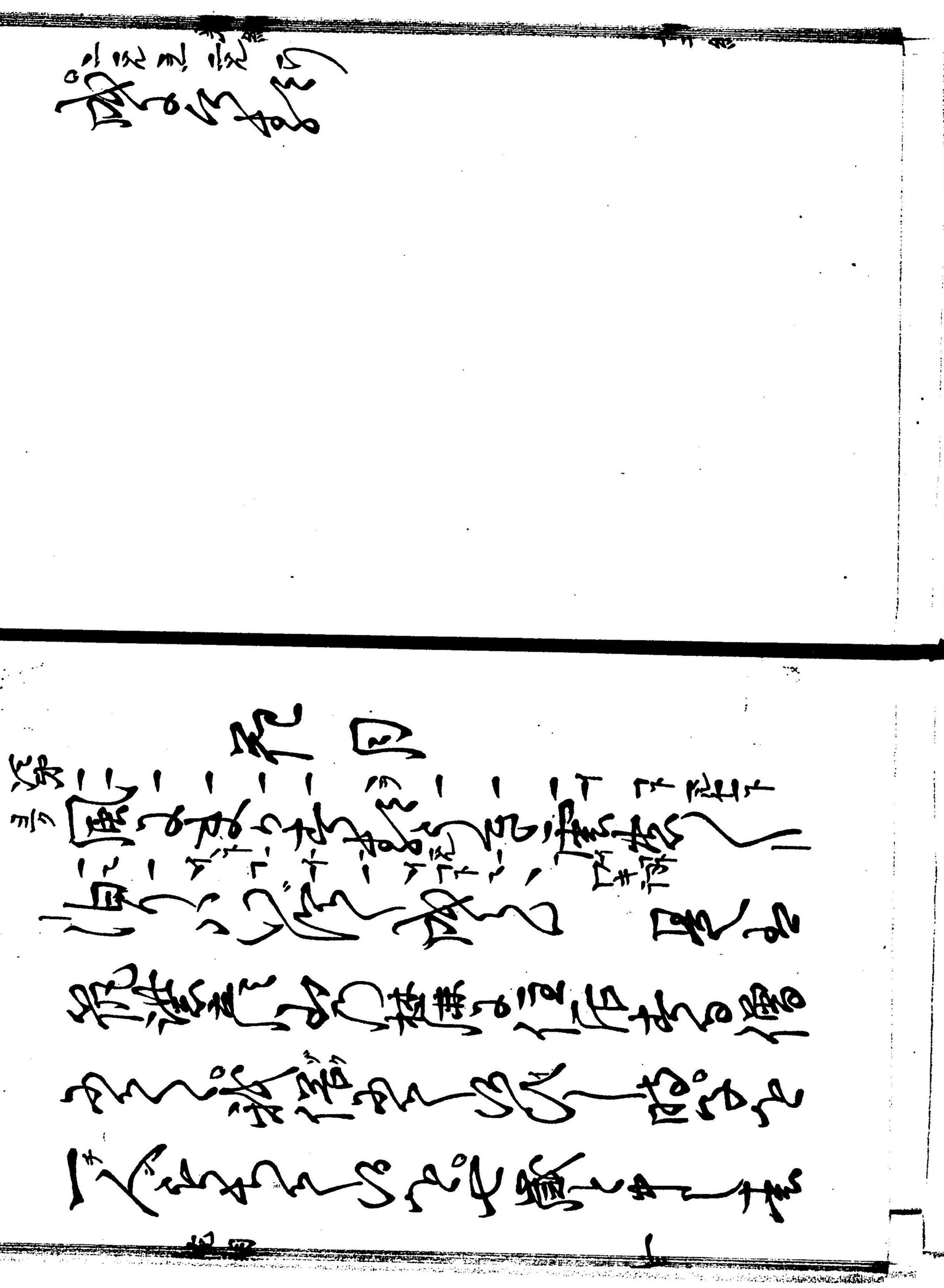
月ニ

ゆ　ゆ

月ニ

月ニ

月ニ



乃ち[illegible]たる[illegible]失ひては程
なく思ひを出部の縁と思ふが様の
法と成り諸国を修行住
まきぬ其の分を志まして
傳むべき親も[illegible]ぬやうなる
れぞ求めるる心をもるるも

あり千里を行くも遠くて野
の所なる国自然見ぞ城
の[illegible]なる
思ひきや花の都を出て
世を厭はる清水を寄り花を
も詠めぞやとは[illegible]宮

今日は清水へ詣しまうあるを守
はあるまうくいぬ。古侍申（シテ）仮人を
こえ年作べー△ 松尾を花
月と中（ス）去るありぬ。ひの人我（ガ）ゐを
青ものを差くいを。ぬ。ふ形位
ものを及ぐを。扱くいの家

とろへば生いは花夏は瓜。秋は菓（コクワ）
冬は火（ヒ）鉢果物果をぶ青は也（全）
一（ヒト）ぐ（ク）ける強くといへば人見
（エ門）
をゆ（イロ）ア 侍も未（ミ）世（ヨ）けりて
ありて（一説入（ヒ）ア）天下を隠（カシ）もるを花
（イ）（ア）（ト）（イ）
月（ゲツ）と我をぐ中也。 行て今

日を過く古也作そ。さもば
して迎ハ雲ゞ居者よりゝ花
ゝ心を引ものゝ思ゞ付な
ゝ迎とゞ不ゞ過ゞ来ゞ来ゞ来ゞた
ゝり。さばゝ人ゝ物ゝ者ゝ来ゞ
小奇を祝ゝ待ゝ迎ゝ作ゝ。

ゝ中ゝ一ゝ二ゝ三ゝ入ゝ日ゝ入ゝ月ゝ入ゝ日ゝ入ゝ月ゝ入ゝ
さゝ日ゝ月ゝ入ゝ世ゝ間ゝ
絶ゝ来ゝぬゝ者ゝ
ゝ中ゝ人ゝ者ゝ言ゝ
ゝ中ゝ人ゝ者ゝ言ゝ
ゝ中ゝ人ゝ者ゝ言ゝ
ゝ中ゝ三ゝ入ゝ月ゝ入

るよ△（ネハシテ）こゝ萬ゞ花を散らは
よゞ某射ゝ（イ）おゝらはゝ△（ヨカシ）泉
ゝのそゝいゝく△（シテ）萬代ゝあゝよ
ゝちゝゝまほそらぎゝだ長刀
もあゝぶゝ我花月ゞゝよゝ（合）
ゝれゝゝぶゝゝゝ刀（カタナ）ハゝゝゝび

弓ハ的（マト）射（イ）ゞ為ゞゝる薩花（ゼン）
根ゞ積ゞ小島ゝゝも射ゝ松ゝゝ
ゞゝゞそゝ異國ゞ楊由ゝ百（バク）
ゞよ柳代塚ゝゝれ概ゞ百
矢をゝるふゝゞ我ハます
花ゝ梢ゞ萬ゞゝゞ射ゝ松ゝ

と思ふ恋ぞ揚由よそれたるま
じ長面白やそれは柳見
は揚ぞ死を鳴べ生さまは号ぞ
きは揚由こそ死は戸ぞ我
かをるも号よるぞてはよも
なのでいでわひてきも嘩

ひてきも嘩ぐらるあ
だをつぬいぐ口けそばを
きくれかぐ衣の袖をぐの
ぐぬいぐ花ひ水陰よ弱ひよ
つぐよつひきぐ元ゆぐと狩ばやと
思へぐ佛けいまめ狩よ殺生

戒をば服するまで言語同断面
白き事を作られぬるの列の
御前をみるに當寺は謂を曲
葉を作りて古詠ひをせ古
て一節御詠ひくるの古可堂
まるは△やまをき風ぞ吹き

申ちぎるみてはちまぢ
みやぢ哀ぢ悲の書ぢ花ぢ恵
の国可からぢ三ぢの
秋の月五濁の水る歌清
松洲寺は坂ぢ上ぢ田村丸ぢ同
二年ぢ生の比草創有し洲

方へも音羽山の嶺の杉むら
まぐるまでふかくもるる清
水ながれ行て波まぎれ
なる時は瀧の水五色みえて
岩きれはそこをあやめ
よ入其水上を喜るみやらん歌

そこの岩の洞をくぐれて流れ
よ堀きそこの青柳の打なび
りそなよりさそふ香泗
方へ薫まそれば佐ふ柳ゝ可
なる楊柳の親を行ゝ
みそまもかぐ皆人まを

合さ牧も手音物とぎきて
ぎくと申きば柳ハ緑
と為ハ揺よあぬ老すすで
消白砂ハ花咲きぬ散ることそ
すぐれ拾ひ拾ふるすもの
花さくやこりの世をも申せ

蕗不思議やぽ思ある華同を
よくこそ見ばなぐ信ずて出
ひ見ずいふ音
ありでやと思ふ作めすは花同
申べきすれる 仕ずみて
ず 待ずいづ人全

わらひて
者みるは
國を治めぐらひて
のぼりひこ
天物みるに
を思ひて

見ハ流れ
侍行ハ
我ち

扨

あり是弘法の
きてあるか
行すを
この花月
しなみて
実と中ハ

侍ハ
きぐば
見ひ
侍ハ
ふらを

つるやうみさ〜しぶ沙へたちう
ものごと〜ハぢ〜ちをたちちは
ひと〜ぶ〜ちつまぐ〜ぶつ〜叔部へ
古物りゆく△扨も我嵐雪表
ゆのぐりゆ(ヨロヒ)ぶ(ナ)ぶ〜ぶ〜ぶ〜

もうきよハぎ　やとい　さん　ぼだ　ぼだ
の境なる　思ひ　ぐら　城と　間ハ　天狗
よりも　れて　うち　やさて　京迄
きよく　扱京　ぢちう　きよく　ぢぐ
の山　ち京　ぼう　ぼう　野　の岩
ぢ京　ぼう　言　ぢ　ぢ　の大嶽ま

ぢ　ぢ　ぢ　心　ぢ　ぢ　社　の横
ぢ　の　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　日　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　の　ぢ　ぢ　や　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ
ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ　ぢ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鐘　馗

昔唐土終南山の樵夫信濃
なる者みちを拔も拔て奏聞申
べきやうなる向ひて帝都より新し
き
終南山を立出て野辺の露
をかき分ぎバ村雲ちぐ屋

ちるを眺望して海路をるかまで
ぐれば釣糸ふるもかそる浪ぶる
ほぐるもあるなどあり〳〵
あるべしのまを成振べるゆゑ
ゆけるべ行ずるべそ 我
もう捨べ終りる細あるふすり悪

鬼をたて國出を守べるうち
ひあり君賢べをあり治で
官ゆみ祝べ寺端をなべき
そのぼゆを奏べ出べるまへ
異ハ公思屋けた事ぽ拙ぽ
きいうあるべそ べうい行ち

作もべき我心鐘馗といへる進
ぜるるぶ(キウダイ)知はぐきんよてぎ
其執心を云るがそ(ワキ)はせる(コウセイ)牧
のぐそあり　(シテ)完く種媚の由
ア(シテ)ハ世ム隠まくあき進ぜるぐ
ぐ亡心るそ由(シテ)ましろ(ヨク)中

あ(ワキ)とゆ(スム)ぐ(シテ)ハ(上ヨリ)ハ(ツレ)の冷き
(ツレ)ぶ(ツレ)草(ソウ)中(チウ)露よ吉宿
(ツレ)ま(ウ)ぐ(ヤア)寄ぬるみ(ツレ)かそ(ツレ)ま(ツレ)ぐ(ツレ)老(ウ)松(ウ)
(ツレ)ぐ(ツレ)ぶ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)も松養
(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)も思(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)
(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)も世(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)
(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ(ツレ)ぐ

いかをいかとうたをうたい
ひとさまざまめいもの一生は風の前
の雲に月回る数しやうこの世
は水泡よりあそびそうけおよ紀
そこのやうに縁綿数のうちもよい
有為は悲しひとつぎ翡翠衣先

長のうちもよい宵漏の願力安堂と
わ栄花はまさに雲の花昨日
は咲くるれぞ明日は衰へ嵐力
の秋の光り弥増ゆよべみ
減ぞうち春さり秋なりけるを
散じ紫打つ時うたうきき家

いろ〻樂しなれよ花ぞ悲しき
とは、いらくきそうきて
撫子の花の露
る露よりもたゞちるものはかなき
ちよはあるらんきてもちて
ぜとは花のうらちるべき秋なる
田鶴の子をとゞ四ぎは田長

かのきもぐるべきこゝ郭
きるぬ。あはれなる人界
とゝ行ふ詞きたべき
きは物ぐるのちるは青
都よ新つぐらく奏閃中べ
しぬくまるせ給へよ

口てえ〜多れ平成の法をあ
ラふちんと　ロキセニ　ヨク　えようきゃく
ぞ〜きかう〜　シテ　上同　倶舎伝註
せりぞ〜　ヤ　ウ　ヤ　トル　ニ　元　ヤ　ト　ニ　ヤ　ト　ニ　ヤ　ト　ニ

も法きゝ法ぞ法と共
に法を後頭も
よ言葉ばは妙法を
ばは
ばは
ばは

鐘楼及び門楼及びそ
の外とりどりの悪心をひるがへ
して合掌起敬の意を捧ぐべし
宮殿あるいは堂塔あるいは國土を荘厳
せるもの樓閣宮殿樓裏雲霧の
樓閣宮殿とうとうとして遍滿

あるいは廊殿
階段とともにつるぎをひそ
めて宮殿くまなくふれもしまど
ぶ果ぶ果ぶ鬼神を面方法
せおられもそば匂ふばばく
ゆ切を形てまれあるぞ

明治四十年一月二十日印刷
同　四十年一月廿五日　發行

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉（電話番町三百十六番）
京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助（特電話二百九十番）（振替貯金三五六八）

版權所有